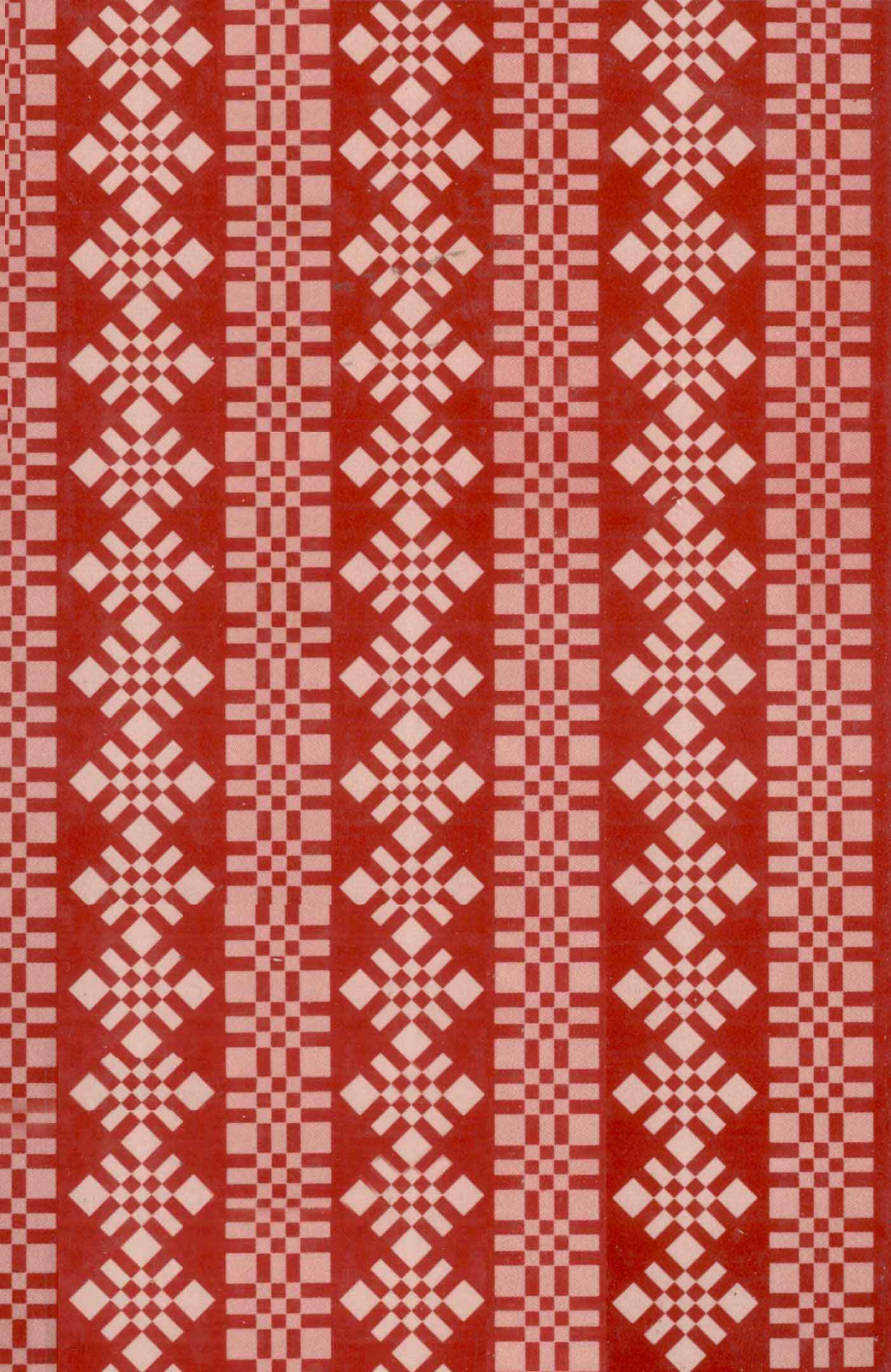




ジュニア版・日本の文学 46

青春

伊藤 整

集英社

ジュニア版
日本の文学 ④ 青

春

昭和五十年 9 初版第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者 伊藤 整

発行者 陶山 巖

編集 株式会社 創美社

印刷所 株式会社 常磐印刷所

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十

電話 東京(二六五)六一一一

N・D・C

913

落丁・乱丁本はおとりかえします。



目次

青春 せいしゅん

五

海 うみ の見える町 まち

二三

注解

二七

伊藤整の生涯と作品

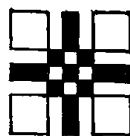
薬師寺章明 二七

年譜

小田切進 二九

装幀 鈴木安男

さし絵 宮田武彦



刊行のことば

『ジュニア版・日本の文学』は、明治以後の近代日本文学のうちでも、少年期に必読の作品をよりすぐって集めた全集です。

編集にあたっては、どの作品も当用漢字、現代かなづかいにあらため、ふりがなを多くして読みやすくしました。また、作品を飾る美しい原色口絵や、さし絵を豊富におさめました。巻末には、むずかしい言葉や事がらの注解をつけて作品の理解をたすけ、第一流の先生方によって、作家の生涯と文学を、わかりやすく解説されております。

年譜とあわせてお読みになると、いっそう作品に親しみがもてることでしょう。

『ジュニア版・日本の文学』を読めばたのしみながら国語の学習ができ、また美しい人格をきずくものとなるものと信じます。

《監修》

文学博士 作家 川端康成一
作家 伊藤 藤 康 整

青

春

青^{せい}

春^{しゅん}

その日の夜、信彦^{のぶひこ}は、細谷教授の宅^{たく}での会合に久しぶりに出ていた。十畳^{じゅうじょう}あまりの書斎^{しよさい}は、周囲を全部六、七尺^{しちやく}の高さに和洋の書物や研究用のカブドの箱^{はこ}でうずめられて、暗く重々しかった。中央の机^{つくえ}で細谷教授は額に落ちかかる長髪^{ちやうはつ}にわずらわされながら、イギリスの寺院建築の大きな写真帳をめぐっていた。藤山^{ふじやま}と武光^{たけみつ}がそのまわりに肘^{ひじ}をついてのぞきこんでいた。それは細谷教授が最近とり寄せたものであった。

「これがティタアン・アペイだ。ほぼ完全のように見えるけれども屋根は大方落ちてゐるんだ。手前に

見えるのがワイ河^{がわ}でワアズワアスのよく散歩したところだ。」と教授はめくっていった。次にその細部写真^{しよぶしん}があった。

「見たまえ、この穹窿^{きゆうりゆう}は特殊^{とくしゆ}な角をなしているんだ。これはソオルスベリーのカシイドラルのとはまったくちがう。ええと、ソオルスベリーは」と言いながら教授はいそがしくめくっていった。その出入り口は一年の月の数を現し、窓^{まど}は日の数を、柱は時間^{じかん}の数を現す、という美術史の講義^{こうぎ}のときの教授の鼻^{はな}にかかった声を信彦は思い出していた。実物を見てきた人にある一種^{いちしゆ}の陶醉^{たうさい}感がいまも教授の身ぶりにみなぎっている。信彦は教授の手の動くさまを後ろから見ていたが、ふと先刻^{さうき}まですわっていた椅子^{いす}へもどって、冷えかかった茶を飲んだ。

「おい。」とそのとき沖豊^{おき}作が小声^{へや}で室のすみの三角^{さんかく}棚^{だな}の近くから信彦を呼^よんだ。茶をおいて近よると、

彼はボティチェリの大版の画集を、花瓶をおいた小机の角にもたせて膝でささえながら見ていた。彼の開いているのは、美しくすんだ色調を生かした着色の「ヴィーナスの誕生」であった。

「いい複製だな。君はどう思うかね。僕にはこういう美の形もオブシニティーとは切りはなされないものだがね。僕には細谷さんの言葉がわからないんだ。本当の芸術は裸体をあつかってもけっしてオブシニティーを感じさせない。尊いものを感じさせると言うけれども、僕はそうは思えない。たとえばこの絵にしても、直接にあつかわれているモチーフには、女性の羞恥感があると思う。そしてこの女性を美しく見せるものはこの羞恥の姿態ではないのかね。僕はそうだと思う。敏感な細心な羞恥というやつは感覚的に性につながっているんだ。だからこういう表現に接しては当然われわれはオブシンなも

のを感じべきなんだ。だいいち、それなしには画家はヌウドを描けやしないんだよ。細谷教授にそれを認めさせることはむりだろうがね。」そこで沖は人の悪そうな笑いをもらした。信彦は三、四歳年上のこの画家とこの会で知り合ったのだが、学校の友人以上に親しくしていた。沖はこの街にいる洋画家仲間であつてゐる黒鳥会のメンバーで、東京の展覧会にもいくどか出品していた。絵を売るには多少でも知人の多いこの街が便利だというので、展覧会期のほかはこの街で親戚の雑貨屋の倉庫のすみを借りて自炊生活をしている。黒鳥会の批評を毎年きまつて土地の新聞に書く細谷教授のところには、学校の生徒のほかはこの会のメンバーも集まつたが沖はその定連の一人だつた。この学年末から新学期にかけてしばらく沖にあつていなかった信彦は久しぶりで沖といっしょになつたのである。いつも独断的ではあ

るが真剣なものの言いかたをする。この男に、学校の友人には見いだしえない芸術的信念を信彦は感じとり、あうたびに熱心に話し合うようになった。彼は多少沖に引きずられていた。沖から受けいれるものが、まだまだあるという感じをいただき、多分の謙譲さで彼は沖に接していた。しかし沖は時として、意地悪く人を当惑させたのか、本気に主張するのか分からぬようなものの言いかたをする。今もその例だ。そういうとき信彦の唯一の対抗法は身をかかわして彼をやりすごすことであつた。

沖は細谷教授に美術とオブシニティーの問題を提出してみたがっているのか、と信彦はちよつとためらつた。それはしかし文学のある部分について信彦の考へていることと共通の問題でもあつた。露骨に描いてオブシニティーを感じさせないのが立派な芸術だというのは芸術批評家もよく使う言葉だ

が、信彦はそれに対して沖と似た疑問をいだいてゐる。細谷教授は当惑するにちがいない。だが皆を当惑させてみるという氣にもなつた。細谷教授が、たとい教室で言っているのと別なものを心内にいだいていても、それを表白できないような羽目におとし入れて喜ぶような沖のやり方が氣になり、おれはそのときも身をかかわすのかと反省もした。それでいて彼はその言葉をとおしてやり、細谷教授に伝えてみたいという衝動に従つた。

「先生に言つてみたまえ、そのとおりを。僕は前にも君のその説は聞いているんで、同感せざるをえないところもある。ひとつ細谷先生に君から当たつてみたまえ。ゆきて巷にそを試みよ、と言うところだね。」

沖は信彦の顔を見て、にやりと笑つた。やつてみようか、といういたずらつ兎らしい顔になつた。髪

をむしゃくしゃにのぼし、不精ひげを口のまわりに二、三分の長さにはやしている沖の顔が、その笑いといっしょに変に少年らしいおさなさを帯び、あかがういて見えるようなあおいその顔には毒舌に似合う何かがあった。沖の生活の形には、自分をいためていなければ安心できないような被虐性が感じられる。

室の奥の扉があいて、細谷教授の妹の美耶子が、錫の盆にサンドイッチをもつて現れた。美耶子は五尺二寸ぐらいあって、女としては長身だった。肉づきのいい面長の顔に、美しくはあるが強すぎるぐらいはつきりした大きな眼がきわだっている。よく黒い着物を着る人だな、と信彦は思い、「おい美耶子女史はまた黒い着物だな。いつもじゃないか。」と彼は沖にささやいた。

ポケットから煙草をとり出して火をつけていた沖

は、煙に眼を細めていたが、煙草をくわえたまま口の反対のすみから、聞きとりにくく答えた。

「染色をやっている高等工業学校の生徒がそんなことを言っちゃいけないよ。あれが黒なもんか。日本の昔からなる紺だよ。」

彼女は氣をつけて本を片づけながら、皆がとり巻いている大きな机のはしに盆をおいた。

「ごめんなさい。召しあがりものを持ってきましたわ。」と言い、美耶子が教授のほうへ盆をおしやるのを信彦は横から見ていて、その着物が深い紺へ薄のような黄色の筋を縦横に散らした紬の一種であることがわかった。

「それでは、サンドイッチでも食べましょうか、諸君。」と細谷教授は言つて、はなれたところにいる沖と信彦のほうを見た。

「はあ。」とすぐ中央の机に近よったのは信彦であつ

た。沖はじっとしていた。沖は自分流の沈黙のなか
にいたときは、容易に外部からの言葉で動かないの
だが、今日のそれはこれから言い出すことを意識し
てのことのように思われた。

「神津さん、沖さんと呼んでくださいな。なかなか
動かない方ねえ。」と美耶子は沖のほうを見ながら信
彦に言った。聞こえるぐらいの声であった。立って
沖のほうに眼をやっている彼女の姿は、腹を立てた
ようにきつとしたところがあって、喉から顎のあた
りが、机の中央にあるスタンドの灯を下から浴びて
白くうき出した。

「絵描きというものは規律がきらいなんです。」と
説明しかけたが、ふと信彦は気が変わり、美耶子の
きつとなっている態度に、ぶつつけるように「だめ
なんですよ、あの男は。人にあたえる抵抗をたのし
んでるんですよ。」と言った。きらりと美耶子の眼が

自分に投げられたと思いながら、彼は辛子のよくき
いたサンドイッチを食べた。美耶子はまだ沖をにら
むようにして見ていた。

「おい沖君、美耶子女史が、言うことを聞かないと
いってご立腹だぜ。」と、がっしりした身体を行儀よ
く制服に包んで、きちんとすわった武光が沖のほう
を見ずに太い声を出した。

「あ、腹がすいてなかったものですから。」と沖はよ
うやく画集を閉じて腰をあげた。沖は彼のほうを立
って見ている美耶子をさけるように前かがみになっ
て椅子や本の堆積の間を机のところまでやってき
た。髪が乱れていて、ねむたいような顔になってい
た。背が低くはないのだが、美耶子の前をとおると
き、かがんだ姿勢のせいか彼女よりも低く見えた。

「君はこのごろ熱心に描いているそうですね。」と細
谷教授が沖のほうを見て言った。教授は美耶子によ

く似た顔だちだが、色が黒いので、ちょっと見には
ゆううつに神経質に見える。しかし教授の瞳は明る
くあけっぱなしの性質を現していて、この人の前
では悪い考えをいだかないように人にしいるところ
がある。

「ええ、しかしどうも絵が変わりかけているので、
いろいろなことで困ってるんです。あれですね、細
谷先生、僕はこのごろになってから、美の意識とい
うやつはオブシニティーの半面ではないか、とい
う考えを持つようになったのですが、悪いでしょう
か？」

武光五郎はいかにも先生の前にいるというふう
に窮屈そうにすわっていたが、きらりとおこったよう
なまなざしを沖に投げた。美耶子は机をはなれ、室
のすみのガスストーヴにかけたポットから茶を皆の
茶碗についでいた。

「自然の美というやつは、じゃ、君の意見ではどう
なるんだ。」と甲高い女性的な声で、すみのほうで椅
子の背によりかかっていた背広姿の庄司が言った。
彼はこの高等工業学校の十数年前の卒業生で、母校
にもう長いこと実験室助手と参考館の整理係を兼ね
て働いているのであった。

「自然はですね、僕はよく考えたのですが、美術と
しては独立したものにあつかわれていることがある
けれども、結局人間の背景にすぎないように僕は思
っているんです。静物画というようなものは、工芸
品じゃないか、と僕は思ってるんです。それで絵と
しての正統は人体画なんです。ことに女性のヌウド
だと思ふんです。そうすると、僕にはどうしてもオ
ブシニティーの意識なしには描けないんですよ。」
ねむったような顔をして、ぼんやりと言った沖の
言葉の裏側に妙な執念があつて、それが皆にすぐ感

じられた。彼に答えるならその執念のようなものを何とかさばかなければならない。庄司はそのいやなものにつき当たりたくないといふもうように沈黙した。この場でその論旨だけをまっすぐにとりあつかえるのは、細谷教授だけだった。武光も身じろぎをしたけれども、きたならしいというように眼のすみで沖をにらんだだけでやめた。信彦は、自分が沖と同じことを言い出したように固くなっていた。

「それは君が批判者の立場でなく、制作者の仲間に加わっているからだ。僕もそういう心理的な動きをまったく否定はしない。けれども衝動というものは高められなければならないんだ。そりゃ衝動の量の問題でなくって、質なんだ。だから僕は昇華ということをいつも言っておる。昇華というのは、人間の肉体的な衝動の質を、芸術的なものに変質させることだ。それのできるのが芸術家だといふべきなんだ

ね。人間的な世界が芸術の中心だということは、君の言いかただとすこし過度になるけれども、ほぼ僕は君に賛成してもいい。しかしできた作品がオプシイニティーにとどまっていることが最上の状態と言えないことは事実だね。君の説は一つの経験者の声として僕も参考に聞いておこう。しかし」

そのとき大机の反対側に沖とならんで腰かけていた学生の藤山が隣の沖をふり向いて、

「じゃ、君、あれかい。君はこのごろ裸体画なんか描いてるのか？」と言った。ちょうど細谷教授の声の切れ目で、皆がひっそりしていたときだったので、それが案外に大きくひびいた。口をもぐもぐさせていた武光がまず笑った。庄司の細い笑い声がそれに和した。藤山は笑いにさそわれながらすこし赤い顔をしていた。信彦は自分の顔がひどく赤くなるのに困った。彼も藤山と同じことをちやうど考えていた

のだ。

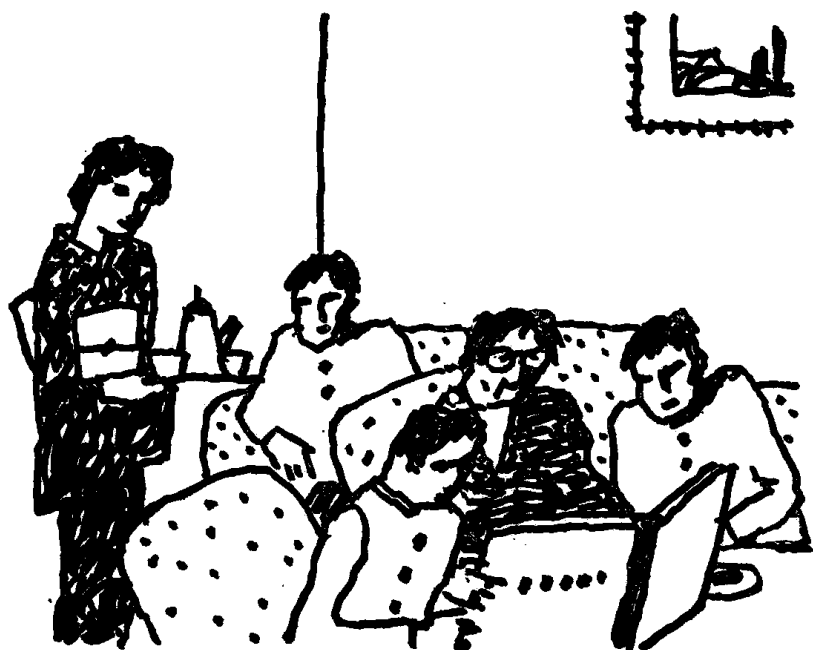
また美耶子^{みやこ}が皆^{みな}の前に新しく入れた茶を配^{くば}っていた。後ろ^{うしろ}から彼女^{かのじょ}が信彦^{のぶひこ}の肩^{かた}越しに茶碗^{ちやわん}をのぼしてよこした。信彦はちょうどそのとき赤くなっていた頬^ほを美耶子に見られたように思い、すっかり困惑^{こんわく}して、眼^めのやり場に困^{こま}っていた。そのとき、庄司^{しょうじ}が笑い声をうち消すようにしゃべり立てた。

「細谷先生、しかし沖君^{おき}の説は乱暴^{らんぼう}ですな。美意識と生理的衝動^{しょうりていしやうどう}と同一視するということには僕はとても賛成できません。たとえばです、ここにある壺^{つぼ}ですね。これの美しさは何も人間の生理と関係がないでしょう。文学ではどうなるのかね。」と言って、庄司は生徒の仲間^{なかま}で文学青年としてとおっている神津信彦^{かみづのぶひこ}の顔をちらと見た。だが茶を配り終わった美耶子に隣^{となり}にすわられた信彦は頬のほてりが去らず、とまどいした表情が顔一ぱいにただよっている。そ

れが庄司にはひどく子供らしく見えた。庄司は言いつづけた。

「文学の感動はけっしてそういうものとは縁^{えん}がないでしょう。煽情的な文学^{＊せんじやう}というものはけっして第一流のものではない。文学のあたえる感動はもつと倫理的なものじゃないですか。そして生理的な汚^{よご}れから、高いところへぬけ出るように人間を動かすものでなくっては、絵にしる音楽にしる第一級のもではない、と僕は思う。」

美耶子は信彦とならび、庄司の真正面に腰^{こし}かけ、眼をふせて、テエブルの上をじっと見ていた。それに気がつくと庄司はちよつとひるんだように口をつぐんだ。机のはしにいる沖^{おき}は先刻^{さうき}藤山^{とうざん}が笑いのきっかけをつくった問いにも答えず、ぼんやりとして、言われているのは自分のことでないともいったようすだった。細谷教授が言った。



「庄司君、そりや関係がまったくないとは言えない
んで、君も言っているように、人間性を高める働き
は大いに認めるべきだが、僕が多少沖君の説にきく
ゆえんはだね、その生理的衝動そのものがなければ
創作の発生はないという裏からの意味なんだ。案外
に一般的な眼からすればきたならしいものが制作を
直接に助けているかもしれない。僕はそういう場
合、一般的な潔癖さ^{けつぺき}とちがった美意識の設定を望ん
でいるわけで、その僕流の考えにおいて、ともかく
もよき芸術を産むものは美の意識でなければならな
い。だからすこし強く言えばだね、沖君は自分の美意
識を一般的なフイリスティンの標準に持つていつて
ならべるからきたないように思いこんでしまわざる
をえない。もし沖君の制作がいいものであれば、そ
れはかならず芸術論的には美しいものに根ざしてい
るはずなんだね。ところで文学論にまでなりそうだ

が、神津君^{しんづ}どうかね、庄司君^{しやうじ}の意見については何か考えないか？」

信彦^{のぶひこ}は美耶子^{みやこ}とならんですわっていることから感じた羞恥心^{しゆうしん}とは別に、自分の内部からあるごうまんな心が頭をもたげてくるのを感じた。自分の前にいる庄司から見れば、自分がいま美耶子にならんですわられたことをただ子供っぽくはにかんでいるだけに見える。その印象をむりに直してしまふほどの気持ちにはならなかった。とにかく美耶子とならんではにかんだという事実は消しようがない。藤山^{ふじやま}の愚劣^{ぐろつ}な冗談^{じやうだん}で彼^{かれ}と同じことを考えていた気持ちの虚^きをつかれ、それを美耶子の前にさらしたという意識から、彼のはにかみは止めようがなくなっているのだ。そういうことに気のつかぬらしい細谷教授の言葉は、彼がずっと自分の内側^{がは}におしこんでおいた骨^{ほね}っぽいのものにじかにふれたように思われた。かと言っ

て、彼の言い出すのを待ち構えているらしい庄司の気配を見ると、ばからしい、という反省で自分をおさえる気になった。こういう子供っぽく見えるはにかみとごうまんさとの奇妙^{きまよう}な交流を、信彦は自分でも妙だと思ふのだ。しかしその二つには確かに一脈^{れんぱん}の聯繫^{みまう}があつた。それは自分にだけわかつていることだった。美耶子が自分のそばにいなければ、おれもいま言い出すのだが、と彼はちらと思つた。それに自分の意見が沖^{おき}の肩^{かた}を持つことになるのはわかつていた。沖の批判^{ひはん}されるのを、信彦はなかば自分のこととして受け取つていたのだ。その沖のごうまんな沈黙^{ちんもく}が十分に答えているのではないか。

信彦はにこにこ笑つた。自分で知っているいつものあいきょうのある笑顔^{えがほ}だ。彼はうるさくなると、いつもこの笑顔の中へにげこむのである。たつた今までにはにかんでいて、そしてにこにこ笑っている自